

情報共有

(4枚 非管理用)

NISA非 ← プレス対応チーム

プラント状況(本店レク)議事メモ

東京電力株式会社

平成23年9月1日 19時40分 広報班

取扱説明書、公開不可

日時：平成23年8月31日（水）11:00～11:40

場所：東京電力本館3階大會議室

先方：記者約25名（カメラ3台）

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

・福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ（8月31日6:00現在）

[REDACTED]よりプラント状況、配付資料について説明。

質疑：

Q. 2号機圧力容器ベローシール部の温度が数日前に急上昇し、その後も緩やかに上昇している。先日の説明では計器不良が原因ではないかとのことだったが、その後分かったことはあるか。

A. 圧力容器ベローシール部の温度のみが上昇している傾向に変化はなく、その他のパラメータについてはほとんど変化がない状態である。従ってベローシール部計器単体の故障ではないかと考えている。

Q. 今後計器を取り替える予定はあるか。

A. 現時点では点検等をする予定はない。

Q. ベローシール部以外の部分については、ほとんど変化がないことだが、若干でも上昇傾向にあるのか。

A. ごくわずかな上がり下がりはどのパラメータでも見られるが、今回のベローシール部のように約50℃というレベルでの温度上昇はない。

Q. 3号機炉内の注水方法を明日から炉心スプレイ系に切り替えることだが、注水ラインが炉心スプレイ系に完全に切り替わるのにどの程度の日数かかるのか。

A. 9日間の予定で考えている。現在給水系からの注水量は7m³/hであるが、明日炉心スプレイ系注水ラインの準備が整えば、炉心スプレイ系から1m³/h注水を行い、24時間経過を観察する。その後1日ごとに1m³/hづつ流量を増やし、最終的には給水系から7m³/h、炉心スプレイ系から3m³/hまで注水量を増やし2日間様子を見る予定。その後炉心スプレイから3m³/hの注水量を維持しつつ、給水系からの注水量を4日かけて7m³/hから4m³/hに下げていく。さらに給水系を絞るかどうかは、経過を観察しながら判断することになる。現時点では、全ての注水を炉心スプレイ系に切り替えるという結論には至っていない。

Q. 3号機炉内の温度が下げれば、全量炉心スプレイ系からの注水に切り替えるのか。

A. 3号機タービン建屋の溜まり水の水位をなるべく下げたいと考えており、炉内の冷却の状況が順調に進めば、注水量は下げられると考えている。2号機は、3.6~3.8m³/hの注水量で炉内の冷却ができておらず、3号機は2号機に比べ効率的に冷却できていない状態と考えている。崩壊熱の状況からすると3号機も2号機程度まで流量を絞れると考えており、そうなればタービン建屋の溜まり水の水位を下げられるのではないか。

Q. 4号機使用済燃料プールのホースから水が漏れた原因が「腐食」と断定されたことで、3号機炉心スプレイ系のホースの接続工事ができると判断したのはどのような理由からか。

A. 4号機使用済燃料プールのホース腐食の原因是、プール水にある不純物と考えられる。3号機に注水する水は淡水であり、そのような不純物による腐食の影響はないと考えているため使用済燃料プールと同様のホースを使用しても問題ないと判断したのも。

Q. 3号機炉心スプレイ系に接続するホースには何も対策を施していないということか。

A. 使用済燃料プールと同様のステンレス製のフレキシブルホースを使用することになるが、口径の違いについては確認する。

Q. 福島第二原子力発電所4号機のダストサンプリング結果についてセシウムを持ち込んだとの説明があったが、作業員に付着していたものが扉の解放時に飛散したということか。

A. 福島第二原子力発電所は現在通常の換気空調系で建屋の換気を行っており、基本的には、外気を吸い込んでフィルターを通して排気筒から放出している。従って原子炉建屋の中に外気にある放射性物質を微量ながら吸い込んでいる可能性がある。今回格納容器を開けた際に、床面や衣類に付着していた放射性物質が人の通行によって持ち込まれた可能性はあると考えている。

Q. 水処理設備のポンプ不具合等の原因究明と今後の対策について、本日保安院に提出することになっていると思うが、公表の目処はあるのか。

A. 最終的な取りまとめを行っており、保安院への提出が間に合えば夕方の会見でお知らせできるのではないか。

Q. 5, 6号機側の仮設タンクの水位が上がってきており、低濃度の滞留水が敷地内にどの程度あるのか。また現時点の仮設タンクはどの程度設置されていて、今後の設置計画はどのような状況か。

A. 5, 6号機北側の仮設タンクは、12,200m³の水が受け入れ可能であり、現在移送を行っている。その他メガフロートに10,000m³の容量があり現在7~8割の水が溜まっている。また水処理設備の処理水を受けるタンクとして毎月20,000m³ずつ増設が進んでおり予定通りに進捗している。一方進捗が遅れているのは高濃度汚染水を受け入れるタンクであり、2,800m³分のタンクの設置工事は終わっているがその後のタンクについては工事中である。高濃度汚染水の受け入れタンクは、タービン建屋の溜まり水が溢れる危険がある際や水処理設備が順調に稼働しない場合に一時的に受け入れるタンクであるため、今後水処理設備の稼働状況を踏まえ工事工程を管理したい。

Q. 低濃度汚染水は5, 6号機側の地下に溜まっている滞留水と水処理設備で処理した水が全てという認識で良いか。また5, 6号機北側のタンクの水位が上がっているが、今後南側のタンクに移す予定はあるのか。

A. 5, 6号機北側に貯めている水は、分類的には低濃度の汚染水だが、地下水がタービン建屋に流れ込んでいるものであり、濃度は低い。タンク内の水量は7~8割程度であるが、今後の処理については関係箇所と相談しながら方法を検討しているところ。また南側のタンクは水処理設備で処理した水を移送している、放射線物質の濃度としては $10^0 \sim 10^1$ 程度であり、プラント内で再使用することを考えている。蒸発濃縮から出てくる濃縮塩水については発電所内の専用タンクに貯めている。

Q. 双葉断層はあくまで逆断層として評価しているということか。

A. その通り。

Q. 北側については、地震本部は促進傾向と評価しているが、それとは矛盾しないのか。

A. 今回の評価では東西方向に伸びているという傾向と、ACFSとしても抑制傾向としているので、今後、保安院、学識経験者にこの報告書の評価を伺えればと思う。

Q. 3号機炉心スプレイ系で使用するホースは変更しないという理解でよいか。

A. カナフレックスや鋼管にはせず、従来用意していたフレキシブルホースを使っても問題ないと判断した。

Q. 3号機炉心スプレイ系にフレキシブルホースを使用することについて、問題ないとしたのはどういう判断基準か。

A. 流れる水が淡水であり問題ないと判断している。4号機使用済燃料プールSFPの循環配管については不純物が混入していることから、今後長期間冷却を継続するためには何らかの対策が必要ではないかと考えている。

Q. これまでに、今回の方以外に白血病の発症された方は確認されていないのか。

A. 今回の方以外、そのような報告は受けていない。

Q. 作業とは関連はないと思われるが、作業起因が連想されることから公表したことだが、今後もその方針は継続する予定なのか。

A. プライベートな状況下での発病であるため、基本的には公表しない方針だが、今回の例、また心筋梗塞の例もあることからケースバイケースで判断していきたい。

Q. 福島第一原子力発電所のライブカメラに写り込んでいた人の件だが、当該発電所の作業員は今現在何人なのか。

A. 福島第一原子力発電所の復旧作業にあたっている人は多いときには約3,000人。この中には福島第二原子力発電所の安定化センターに詰めているものも含まれている。

Q. その中で協力企業と東電社員の内訳は。

A. 昨日でいうと協力企業の方が2,800人で、残りが東電社員。

Q. 福島第一原子力発電所のライブカメラに写り込んでいた人の件について、今後調査するまでもないという判断とのことだが、その背景を教えてほしい。

A. まず、人物を特定するには手段が限られ、調査が難しいこと。また、危険性が高いというわけではないが、不用意な被ばくになることから、作業員の方への周知は実施していきたい。これまで2回ほど確認されているが、たびたび起こるようであれば何らかの対策を行う必要があると考えている。

Q. ベータ線の被ばくの関連。当該社員への指導を行うとのことだったが、他の社員への改めての周知徹底は行っているのか。

A. A P D の警報が鳴る手前で作業の片付けに入り待避するよう周知徹底している。なお、蒸発濃縮 1 B が停止しているが、改めてフィルタ交換作業の手順を検討している段階であり、作業自体は再開していない。

Q. 改めてのお願いとはどのような方法で行っているのか。

A. 社員へはミーティング等で実施しており、今後、協力企業向けにおいては企業協議推進委員会を通じて周知させていただく。

Q. 被ばくへの危機意識が薄れているように思うのできっちりと対応していただきたい。

A. そのようにさせていただく。いずれにしても、作業前点検等の場で A P D の警報が鳴った時の措置について再度徹底していきたい。もう少しで作業が終わるという時に起こりがちであるので、改めて周知徹底してまいりたい。

以上

情報共有

10枚 (非管理X)

9/1 (取扱注意)

16:01 訂正版

NISAより← プレス対応会議

プラント状況（本店レク）議事メモ

日時：平成 23 年 8 月 31 日（水）18:00～20:50

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 25 名（カメラ 3 台）

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- 福島第一原子力発電所の状況
- 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の各種分析の結果について（第百五十九報）
- 福島第一原子力発電所付近における海水中の放射性物質の各種分析の結果について（第百六十一報）
- 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の各種分析の結果について（8月30日採取分）
- 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水各種分析結果
- 福島第一原子力発電所における高濃度の放射性物質を含むたまり水の貯蔵及び処理の状況（第10報）
- 水処理装置不適合まとめ【参考配布】
- 緊急時作業者の内部被ばく線量の評価状況等について
- 海側遮水壁の基本設計について
- 注水ライン追加後 (FDW→FDW+CS) の流量調整【参考配布】
- 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ（水位・圧力・温度などのデータ）(8月31日 12:00 現在)【参考配布】

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 白血病の件について、診断書を書いた医師および被ばくとの因果関係を確認した医師は血液学会に登録しているのか。

A. 確認していない。

Q. 診断した医師と作業関連性を確認した医師は別か。

A. 何人の医師にかかっているかは、プライバシーに関わるためこれ以上の調査は行わない。

Q. 外部の医者なのか。

A. 東電病院の医師ではない。

Q. 元請けまでに何社を経由して、報告があがってくるのか。

A. 当社と直接請負契約のある会社から聞いているので把握していない。

Q. 就業前の電離診断の結果に異常はなかったのか。

A. 異常はないと報告を受けている。

Q. WBC の検査結果は。

A. 退所する際の測定では内部被ばくゼロと聞いている。

Q. 就業前の累積線量は。

A. 就業前については、通常レベルと大差なし。

Q. 遮水壁の耐用年数 30 年とのことだが、どのように試算したのか。

A. 遮水壁の耐用年数は 30 年経過しても直ちに機能を失うものではないが、評価上 30 年としている。一般的に、海港施設の耐用年数は、30 年～50 年と言われている。

Q. 今後 30 年で福島第一原子力発電所が安全な状況になると見込んでいるのか。

A. 10 年、20 年先の状況を見ながら改良や追設について判断するもの。

Q. 以前の発表では、遮水壁の長さは 30m であったが、23m となった理由は。

A. 地下水は透水層を通るため、難透水層まで打ち込めば十分と判断した結果、23m となつた。

Q. 遮水壁を打ち込む深さは、海面および海底からそれぞれどのくらいか。

A. 海面から深さで約 18m～約 19m。海底から約 10m～約 13m。

Q. 設置する遮水壁の全長は。

A. 約 800m。

Q. 鋼管矢板を何枚ぐらい設置するのか。

A. 600～700 本程度。なお、直径約 1m の鋼管に耳が付いており、耳の部分を重ねあわせて遮水する。鋼管内にコンクリートを流し込むことで、耳の部分を押しつける構造になっている。

Q. 耐水性および遮水性をどのように確認したのか。

A. 耐水性はシミュレーション、遮水性は過去の使用実績などから確認している。

Q. 海洋汚染拡大防止効果の確認とは、どのようなことを意味しているのか。

A. 建屋地下にある水は、ほぼ海に向かって流れるが、地下水ドレンの水位を平均潮位の -0.5m で管理すれば、地下水ドレンを超えて遮水壁まで届かない。

Q. 遮水壁と護岸はどのぐらい離れているのか。

A. 護岸から約 10m。

Q. ドレン水はどのように処理するのか。

A. 処理方針はまだ決まっていないが、放射性物質が含まれていないかなどについて確認していく必要があると考えている。

Q. 工事費用はいくらになるのか。

A. 工事費用は、第1四半期の決算に織り込まれているが、個別の費用については回答を差し控えさせていただく。

Q. 工事開始はいつか。

A. 具体的に決まっていないが、STEP2 の間には着工する予定。

Q. 陸側の遮水壁の設計は行っているのか。

A. 現在、建屋周りの地下水の状況を調べているところである。なお、陸側の遮水壁の設置については、建屋を全て覆うのか、または別の方針にするのか、STEP2 の間で判断したいと考えている。

Q. 設置工事にあたりどのような許認可などの手続きが必要になるのか。

A. 公有水面の埋立免許願い、国有財産使用許可申請、水域施設建設等建設届、国有財産収益許可申請の4つあると認識している。今回の建設計画が取りまとまつたので速やかに対応したいと考えている。

Q. 前回のサリーの稼働率はどのくらいか。

A. 前回のサリー単独の稼働率は41.9%。

Q. 今週の処理量(10,970m³)およびキュリオン・アレバの稼働率(89.2%)は、過去最高の値か。

A. その通り。

Q. 事故時運転操作手順書について、保安院への報告状況は。

A. 提出には至っていない。保安院からは「提出にあたっては、核物質防護上の観点について十分配慮されたい」と記載しており、その点を鑑みて2点ほど回答の内容を伝えている。事故時運転操作手順書は膨大な量であるため、原子炉スクラム時に主蒸気隔離弁が閉となった場合における非常用復水器と格納容器の取り扱いに関する部分を提出すると言うこと、衆議院の関係職員および衆議院科学技術・イノベーション推進特別委員会委員以外の第三者への開示を差し控えさせていただきたいと要望を踏まえ、保安院へ報告しているが、この回答では受け取れないとのことであり、提出できていない。

Q. 保安院はどの点が承諾できないから受けらないのか。

A. どの点が問題になっているのかわからない状況。

Q. 計画線量を検討は事前に行うものではないのか。

A. これまでの水処理作業において γ 線の被ばく線量は概ね1mSvであり、今回の γ 線の計画線量を作業に応じて1mSv・2mSvとしていた。水に触れる作業のため、作業員は β 線量計を所持していたが、 β 線については動作確認のための初期値が設定されたままであり、 β については検討がたりなかつたと、保安院から指示を受けている。

Q. 今後、どのような対応をとるのか。

A. 再発防止対策を踏まえて検討していく。

Q. アレバの除染装置の廃スラッジポンプのB系から漏れた水はスラッジを含んでいるものか。

A. スラッジの移送ポンプなので含んでいると思うが、漏れた量、放射性物質の量は確認できない。

Q. 漏れた水はかなりの高線量と考えて良いか。

A. 既にキュリオンのセシウム吸着装置とアレバの除染装置の前段部を通っているので、10の6乗オーダーまでは行かないと思う。

Q. 当該漏えい場所はどのように対処しているのか。

A. 後段の沈殿装置をバイパスして水処理を継続している。

Q. 除染効率はその分落ちるのか。

A. 落ちると思うが、大部分が前段で落ちているので、後段の設備をバイパスしても問題となるレベルにはならないと考えている。

Q. 前段部と後段部でDF値を測定したことあるのか。

A. 前段と後段で確認したことがあり、ほぼ前段で放射性物質は処理されている状況。10の2乗以下程度になっていると思うが、確認してまいりたい。

Q. 沈殿装置部での漏えいは初めてか。

A. その通りである。

Q. 配管から漏れているのか、ポンプから漏れているのか。

A. 確認出来ていない。

Q. 処理量の目標設定値について、50トン毎時していたが、75トン毎時に変更したと言うことか。

A. セシウム吸着装置→除染装置の系統は50トン毎時、第二セシウム吸着装置の系統は25トン毎時を目標流量としている。

Q. セシウム吸着装置→アレバ除染装置の目標稼働率が90%で第二セシウム吸着装置が80%としているのはなぜか。

A. 第二セシウム吸着装置は3日に1回ベッセル交換を実施しており、また、都度、数時間停止していることなどから80%としている。また、セシウム吸着装置については、三番目の系列にポンプの不具合が生じているため、フル稼働しても90%程度になる。

Q. アレバの蒸発濃縮装置3台が稼働したが、それに伴い第二セシウム吸着装置A系も稼働させるのか。

A. アレバの蒸発濃縮装置はRO膜を透過した濃縮塩水を減らすためのもの。処理水を増やすことで、将来1~3号機の注水量を増やす際の水を確保してまいりたい。

Q. サリーのA系を稼働させないのは何かがボトルネックになっているのか。

A. S P T (B) から廃液供給タンクへの管が 70m³/h なので、大量に処理水が S P T (B) に溜まつても後流側に送れない状況になる。サリーのA系はバックアップ用と考えている。

Q. 本日、原子力委員会において東電が燃料の取り出しについてとりまとめているが、どのような位置づけで検討したものか。

A. あくまで今後必要な技術開発計画のためにイメージをしっかりと確認するために例を示したもの。具体的な方法が今の時点で用意があるわけではない。委員の皆さまがこのイメージに基づき、どのような技術開発が必要か考えていただくための参考としたもの。

Q. 処理水の稼働率が 90% に近づいたが、東電としての受け止めは。

A. キュリオンの4系列がすべて動かず 3 系列でも 100% に近づき、順調に動いていると判断している。本日不適合の一覧を報告したが、今後も不具合等をつぶしながら安定的な運転を継続したいと考えている。地下のたまり水を環境にあふれ出さないのが重要で、引き続き高稼働率を続けてまいりたい。

Q. 不適合のとりまとめについて 32 件対応しているが、本日も 1 件追加で発生しており、不適合が継続していることへの受け止めは。

A. 今週にかけて稼働率は順調に推移したが、これまで何回か不具合で停止しており、稼働率が 50% 台になったこともある。水平展開をしっかりとやることが重要である。32 件の不具合の共通性も分からぬが、早く動かしたいとの考えがあった可能性はあると思う。

Q. 32 件の中でヒューマンエラー関連のもの、初期の設定ミス等、どのように分析しているか。

A. 例えば弁の開閉をしっかりとマークしていなかったためにバルブをの開閉を間違えてしまったケースや、運転して初めて表面線量が高くなりびっくりして停止してみたケースなどがある。一般的には人為的ミスによるもの、運転して初めて分かるようなもの、そもそも設定がされてなかつたものなどがある。

Q. 今後、知見を積み重ねて不適合の分類をしていく予定はあるのか。

A. 引き続きトラブルシューティングをしっかりとやっていきたいが、今後新たに設置する処理設備はよりコンパクトなものを考えていくので、教訓にしてまいりたい。

Q. これ以上詳細に分析していく予定は。

A. 現時点では考えていない。

Q. ベータ線の被ばくの件について、ベータ線の設定をしていなかったのはやるべきことがやれてなかつたということか。

A. 計画線量を定めて運用するのは被ばく低減の観点で定めているもので、オーバーしたことが法令の違法になるものではない。しかし、定めている以上、レビューしていくことは必要であると考えている。

これまでの経験からはガンマ線を中心に計画しており、今回の作業もそれに基づき対応していた。今回の作業は水作業でもあり、ベータ線を被ばくすることは認識していたが、その計画線量をどのようにするかということについては不十分であった。

Q. 通常、水回りの作業であればベータ線の計画線量を設定するのか。

A. 今回もベータ線を被ばくする可能性について認識はしていたが、ベータ線が支配的になっているとまでは思ってなかつた。

Q. 今回の管理状況を踏まえ、これまでの作業においてベータ線の管理は大丈夫だったのか。

A. 水に触れて作業をするのは今回の件が初だったのでないかと考えている。詳細は確認しているところ。

Q. 水処理において、1～4号機の貯蔵量が 91,090m³ と初期の処理量からあまり減っていないのはなぜか。

A. 稼働率が高まってきており、今後はこのペースで減ってくると思う。これまで台風や梅雨で雨水の浸入が多くあつたりした。

Q. 建屋内の貯蔵量 91,090m³ とは別に濃縮塩水受けタンクの貯蔵量が 32,961m³ となつているが、それだけ雨水の流入があったということか。

A. バランスとしてどのように考えているか確認する。

Q. 雨水の浸入が予想以上に多かつたとのことか。

A. 当初、20万トンの中に見込んでいなかつたのは事実。

Q. サイトバンカ建屋の水はたまり水として管理されていないのか。

A. プロセス主建屋の水が 700 トン～800 トン程度漏れでいるもので高濃度汚染水であるが、水処理の週報には掲載されていない。

Q. O. P. 3,000 まで下がれば常温停止につながっていくということか。

A. 一時的な豪雨等で急増しても受けられる水位であり、また、注水量を増やすことも可能である水位と考えている。

また、プレス資料の中で、O. P. 3,000 の後もシミュレーションとしてお示ししているが、廃棄物の処理量等も考慮し、O. P. 3,000 辺りでコントロールすることも検討しているところ。

Q. β線被ばくについて、今後、作業手順の確認を行う際に各種分析を実施するのか。

A. β線の線源であるため、基本的にストロンチウムがあるのでないかと思われるが、今後、確認したいと考えている。

Q. 各種分析は必須ではないのか。

A. β 線は遮へいなどできれば、必要により測定したいと思っている。

Q. β 線の各種分析は時間はかかると思われるが、結果ができるまで作業はできないのか。

A. 遮へいそのものはアルミ箔などでもできるため、作業手順の見直しで対応できると考えている。

Q. アレバの水漏れについて、凝集沈殿装置の後段だけをバイパスしているが、前段と後段を別々に運用することはよくあることなのか。

A. 今回のような不具合を想定して、前段および後段それぞれバイパスラインを設けた。

Q. 前段の凝集沈殿装置後の処理水の除染係数は確認しているのか。

A. 10の2乗～3乗以下だったと思われる。

Q. 白血病の件について、どこに住んでいたのか確認しているか。

A. 個人情報に関する内容のため、回答は差し控える。

Q. 福島第一原子力発電所3号機のパラメータについて、3月21日の午前1時25分および午前2時30分に原子炉の圧力計A系の値が急激に上がっている。一方、茨城県各地のモニタリングポストの数値について、午前3時過ぎから線量が上がっているが、3号機原子炉圧力計A系の上昇との関連性は。

A. 既に公表している内容であるが、3号機の原子炉圧力B系に大きな変動がなく、原子炉格納容器圧力も安定していること、また、CAMSについても値は徐々に下がり傾向であるため、A系の一時的な指示不良であると判断している。
なお、放射性プルームの挙動についてははつきりとわかっていない。

Q. 原子炉は外気と通じている状況なのか。

A. 3号機炉心の大部分が損傷し、底部に溜まっており、圧力底部の制御棒の内管、中性子計測管などの弱いところから圧力容器と格納容器の間で通じている状況と考えている。また、格納容器のフランジや配管のシール部から気体が漏れているのではないと思われる。

Q. アレバの除染装置の漏えいについて、沈殿槽をバイパスさせてしまうと本来沈殿させるものが沈殿できなくなってしまうのではないか。

A. 本来、アレバの反応槽で試薬と混ぜた後、沈殿槽へ持ち込み凝集させていくが、前段にも沈殿槽があるので、ある程度は沈殿処理が出来る。また、後段にあるディスクフィルターで砂等の不純物を採れる。

Q. 野田新首相が代表に就任し、東電に何らかの連絡はあったのか。

A. 政府統合対策室と一緒にになって事故の収束に当たっているが特段指示等があったとは承っていない。

Q. 今後、新首相と社長が会う予定は。

A. 現時点では予定はないが、政府と一体となって事故の収束に向かってまいりたい。

Q. 福島第一の敷地内で水素の発生量は一日あたり何m³程度か。また、現在、コントロールされていると言えるのか。

A. 既にお知らせ済みだが、炉心損傷が起きた場合、600~800kgである。炉心が800°C程度になればジルコニウム反応で水素が発生してくるが、現在は炉心が冷却されているので、ほとんど無いと評価している。

Q. 白血病の方の調査をこれ以上しないことだが、東電として今後1Fの作業起因で白血病は発生しないと考えているのか。

A. 因果関係を説明するのは難しいが、今回の件は個人のご病気とのことで、これ以上調査する予定はない。

●セシウム吸着装置のベッセル交換時における作業員の水かぶり事象について松本本部長代理から説明

Q. 水を被った2名の年齢は

A. 確認させていただく。

Q. 10万CPM超とはどのような意味か。

A. 発電所にあるGM式作業メータで測定できる上限を超えていたという状況。カウント数を測定する物で、mSvに換算できる物ではないので外部被ばく量は確認したい。

Q. タンクの水はどのくらいの量か。

A. セシウムを吸着しているので濃度は高いと考えている。10の6乗程度の可能性はある。

Q. 被ったというのは少しかかった程度か、具体的に教えていただきたい。

A. 確認させていただく。

Q. 水を被った後、その場で拭き取ったのか。

A. 一旦、出入り管理所や休憩所などへ戻ったと思うが確認させていただく。

Q. 被ってから拭き取りまでの時間は。

A. 確認させていただく。震重要棟まで車だと10分程度だが、どのように移動したかも含めて確認させていただく。

Q. 現場にシャワー等の洗浄設備はないのか。

A. 現時点ではない。

Q. 被るリスクがある中で設置されていないのか。

A. 作業がどのようなものでどのような手順を取っていたのかは等、詳細は確認させていただく。

Q. 具体的にどのような作業をしていたのか。

A. 高所での作業と思われるが詳細の作業状況は確認させていただく。

Q. タンクの水を抜くのは何のために抜いていたのか。

A. 使用済ベッセルはそのままにしておくと放射性物質が分解され水素等が発生するため、水を抜いた状態で保管する。

Q. 10万CPMが基準内になったとはどの程度の数値に下がったのか。

A. 通常では1,3000CPM以下になるが確認させていただく。

Q. 被ばく量はどのくらいか。

A. 本人の持っているサーベイメーターを確認したいと考えている。

Q. 水を被ったのは午前9:35頃とのことだが、なぜ公表まで12時間もかかっているのか。

A. なぜこの時間になったのか、本店にいつ情報が来たのか、確認させていただく。今回は内部被ばくがなかったこと、拭き取りでCPMが下がったことなどで緊急性が低いとの考えがあり、連絡が今になった可能性はあるが確認させていただく。

Q. ベッセル内の水を被ったと言うことか。

A. ベッセル内の水か、もしくは洗浄用のタンクの水か確認させていただく。

Q. 被ばくの線量計はすぐに確認できないものなのかな。

A. 通常であればすぐにわかるものなので、確認させていただく。

Q. 弁の開閉を間違えたとのことだが、作業員が間違えたのか、もしくは表示が間違っていたのか。

A. 確認させていただく。

Q. 以前、タービン建屋の地下階でベータ熱傷をしたが、同様の症状は起きていないのか。

A. 現時点でののような情報はない。アノラックは着用していたので、水を直に浸かった状況ではない。なお、病院などへ運ばれてはいない。

Q. 拭き取り除染は何でしているのか。

A. 養液ウェスで拭き取る。

Q. 作業員が水を被るというのは3月末のタービン建屋の件に続いて2件目か。

A. 淡水を被った事例などもあったので3件目だと思うが確認させていただく。

Q. 基準値の超過を確認したのはどこで実施したのか。

A. サーベイメーターは作業場にないので、免震重要棟に戻ってきてから測定する物である。

以 上

日 時：8月31日（水）21:40～21:50

場 所：101会議室

人 数：約20人（カメラ3台）

当 方：広報部

（ベッセル交換時における被水の件について、マスコミからの要望も踏まえ、[]か
ら以下について説明）

- 作業員の被曝線量はハシゴ上部のアノラックを着用していた作業員が 0.14mSv 、ハシゴ下部のタイベックを着用していた作業員が 0.16mSv 。
- 作業員が浴びた水はベッセルから抜いた滞留水である。
- 今回浴びた滞留水の線量を測定していないことから、正確な値は申し上げられないが、タービン建屋の滞留水と同程度のものと考えられる。

質疑：

Q. 高濃度の滞留水を浴びたのであれば作業員の被ばく線量はもっと高くなるのではないか。

A. 滞留水を浴びた量や拭き取るまでの時間等によって被ばく線量は変わってくるため、一概に高濃度滞留水をかぶったからといって被ばく線量が高くなるとは言えないと思う。

Q. 作業員はどの程度の水をかぶったのか。

A. 不明である。明日の会見までには、できるだけ整理し、ご回答させていただく。

Q. A P D の値がそれぞれ 0.16mSv と 0.14mSv であったが、その数値が作業員の被ばく線量という理解でよいか。

A. その通り。

Q. 作業員はA P D をどこに装着していたのか。

A. 通常は胸に付けている。

Q. 先程の会見ではベッセルを入れていたタンクの水を抜き取っていた際に水を被ったとの説明があつたが、正しくはベッセル内の水を被ったということか。

A. ベッセルから出ているホースを抜いた際に水を被ったもの。

Q. ベッセルからホースを抜いたのは、ベッセル内の水を抜いた後だと思うが、それが事実であればベッセル内にはほとんど水が入っていないかったということか。

A. 詳細については不明だが、排水の弁が閉まっているものと思いこみホースを誤って抜いてしまい、作業員が水を被ってしまった。

以 上